In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	出典の周辺 ： 清少納言の「雨声を学ぶ」
Author	小島, 憲之
Citation	文学史研究. 31 巻, p.1-9.
Issue Date	1990-11
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

出典の周辺

――清少納言の「雨声を学ぶ」――

小島憲之

平成元年（一九八九）九月十七日、本学国文学会において、「休間十五年」と題するささやかな話を試みた。その「まくら」の部分の一部、話にして十数分ばかりの部分を、乞われるままに、メモなどをたよりに筆にのせようとする。但しこの部分は全くわたくしの門外にある部分、よろしく専家の御叱正を乞う次第である。なお当日の行事を記録した「會報」第三十五号所収の「本論『除非』考」の概要は、時間の関係上、触れていない「處女地」の部分である。この部分については、「匱に韜める」のみで、「沽らん哉」を目下拒んでいる。

一

この原稿を書いている只今、『島国春秋―日本書紀』（王孝廉編訳、中華民国七七年九月刊）と題する漢訳本文化叢書を、幸いにもある伝手によって入手することができた。その第二章「日本書紀與中国典籍」（八五～一四二ページ）を披くと、わたくしの三十代後半の仕事が誤記のまま漢訳されている。一驚したとはいえ、正式の国交がない限り、無断の翻訳も無理からぬことである。しかもわたくしのいう「直接の出典」が多少でも民国の知識人に理解してもらえただけで十分である。元来、中国における注などの出典の示し方は、旧い経書の伝統を尊重し、それらの語句を出典としてあげるのが一般である。たとえば、『文選』李善注の経書引用の態度は、その一例。わが職員令（『令集解』）にみる「五経」は、

周易・尚書・毛詩・春秋左氏伝・礼記（巻三）

であるが、これらの佳句佳文を漢字一字に詳しく注した顧野王撰『玉篇』―いわゆる原本系『玉篇』―にも、以上の「五経」、もしくは『周礼』・『儀礼』を加えた「七経」よりの引用が多い。これらを学んだ上代びとの出典態度もほぼこれに近いものであったといえよう。

しかしそれはそれとして、日本文学側の漢籍の「受容」の問題になると、「直に」如何なる漢籍によったかが大きな問題となる。五経・七経などの何れかの語句がもとの出典であるとしても、それと同時に、更に近い漢籍、直接の漢籍を指摘することが必要である。これは早くよりわたくしなりに唱道している「直接の出典」ということである。これは本場の中国ではあまり必要のないこと、しかし

受容する側の日本では甚だ重要なことである。

出典の問題に関して、「直接」の出典を重んじることと共に、更にわたくしの学癖として、語句の出典がすでに他の学者によって指摘されているとき、その出典語句をできる限りなぞり、実際に当って原文を再検する場合が多い。いやみではない、自身のためである。原文の誤記は人のなす自然のわざ、それが如何に避けられないことであるか、諸橋『大漢和辞典』にみえる二、三の例を、以前もまた当日もあげたところである―なおこの『大漢和辞典』に対するきびしい批判については、梁容若撰『現代日本漢学研究概観』参照（中華民国六十一年九月刊）―。ここではそれを措くとして、詩の出典の場合、わたくしはそのもとの作者のものした詩のすべてをついでながらパラパラと粗く読んでみることにしている。それは、自分の研究に今は不必要と思われる詩についても、一つの出典をもつ某詩人の詩すべてを読もうとする態度ではあるが、それは当然のこと、別に大したことをいっているわけではない。如何に忙がしい現世とはいえ、それくらいの餘裕は誰にもあろう。

たまたまひらいた『枕草子』の一節、それは、

檜の木、人近からぬ物なれど、「みつばよつばの殿づくり」もをかし。五月に雨の声まねぶらむも、いとをかし

（『日本古典文学全集』四七段「木は」）

の條である。この「五月に雨の声をまねぶ」の出典が、晩唐詩人方干の詩によること、今日定説（金子彦二郎説）であり、何ら異議を挟むことはできない。出典が正しい以上、何ゆえにここで問題としようとするのか。それは「雨の声をまねぶ」（岩瀬文庫本「まなぶ」）という一見変った表現と、『全唐詩』に載せる方干の詩をすべて読んでみたいう「気まぐれ」とが起ったためである。つまり杜牧などは別として、晩唐詩の一端にも触れてみたいという思いが生じ、無駄なこととはいえ、わたくしなりの学の道につながればそれで十分である。

方干の詩は、大江維時撰『千載佳句』に、

長潭五月含氷気（長潭は五月に氷気を含む）、

孤檜終霄學雨声（孤檜は終霄に雨声を学ぶ）、

とみえる（下巻、草木部、水樹）。詩題「陶祥校書陽隠居」を、『全唐詩』に「題陶詳校書陽羨隠居」に作り、「終霄」を「中宵」に作るが、詩題は『全唐詩』によるべきである。晩唐詩人方干の詩がどのようにして抄出されたか、未詳。元・白の詩などはそれぞれの詩集によって『千載佳句』の抄出詩となったものであるが、方干の詩についてはわからない。宋人欧陽修撰『唐書藝文志』（巻四、丁部）に、『玄英先生詩集十巻方干』とみえるが、これは、

歿後十餘年…門人楊弇与釈子居遠収得詩三百七十餘篇。集十巻、今編詩六巻（『全唐詩』巻六四八「方干」）

につながる。なお『唐才子伝』（巻七）参照。右の文の「歿後十餘年」云々が、門人の編集のことにも関係するとみなす場合、わたくしの計算によれば、朱雀帝延長年間（末年の八年は九三〇年に当る）成立の『千載佳句』よりもやや後の撰ということになる。もしこれが正しいとすれば、この『玄英先生詩集』という「別集」よりも、唐詩を集めた「某總集」の方干の詩によって、平安びとはその詩に接したのであろうか。『千載佳句』には、盛唐の詩は比較的少なく、

中唐元・白の詩のほかには、むしろ晩唐詩が多い。その代表的な詩人を任意に示すと、

許渾34首　杜荀鶴20首　方干16首（正しくは17首）　羅隱10首

となるが、晩唐詩がかなり多くの部分を占める。『千載佳句』の抄出は、「別集」よりもひろく唐詩全体に亘る『某總集』によったものではなかろうかと思われる。方干の詩は、宋代まで生きた王贇のいう如く、「氷の如き玉、赤い霞のあやぎぬ」（「氷瑩霞絢」）であり、「麗しく句はず、しかもやせていない」（「麗不二葩紛一、苦不二棘癯一」）といった詩風であるが（『全唐文』巻八六五所収「元英先生詩集序」）、その十七首を『千載佳句』に収めることは、平安びとは方干の詩を多少とも味うことができたといえよう。

方干の詩の出典の部分はわずか二句に過ぎないが、少なくともその一首はすべて読む必要がある。ところが幸いにも、わたくしの解は不要、雑誌『解釈』（三十五巻七号）所収「枕草子に見える方干の詩」に詩解のあることを知る―以下便宜上「詩解」と呼ぶ―。従って、それを紹介しつつ私見を述べることが手っ取り早い。まず詩題の、

「題二陶詳校書陽羨隠居一」（「陶詳校書が陽羨の隠居に題す」）

について、「詩解」が「陶詳校書陽羨が隠居するについて私が書きつけた詩」と解しているが、陽羨を人名とするのはまず大きな誤である。これは、校書陶詳氏所有の陽羨（江蘇省の県名）の隠居処の壁などに書きつけた方干の詩の意。方干の詩の「題二雪竇禅師壁一」、「題二睦州烏龍山禅居一」、「題二桐廬謝逸人江居一」などによって、詩題の意は明らかになろう。まず首聯より（括弧内は「詩解」の訳を示す）。

1芸香署裏従容歩　2陽羨山中嘯傲情

（陽羨が本を蔵める役所の裏をゆったりと歩いてゐる。彼は山中でとりつくろはないで思ひのたけを吐露してゐる。）

前述の如く、右の「詩解」にみる主語の陽羨は誤。なお後のあたりにも「陽羨がどんな人か不明である」とあるのも同様である。陽羨は地名。陶詳君が校書郎（芸香署）という公的な役所にいるときの態度に対して（第一句）、陽羨の隠居山中の私的な生活態度を対比的にいう（第二句）。陶氏については未調査であるが、方干の友人であることは確かであり、方干の詩「遊二張公洞一寄二陶校書一」にみえる人と同一人物である。「嘯傲情」は、陶淵明「飲酒二十首」の、

嘯傲東軒下、聊復得二此生一（其七）

にみる如く、のびやかに放吟する、束縛から解放された心境をいう。なおこの詩は『文選』（巻三十）陶淵明「雑詩二首」にもみえ、李善注本「嘯傲」に作る。但し六臣注本「嘯傲」に作り、「向曰、嘯傲ハ超逸ノ貌」とみえる。

次は頷聯。のどかな隠居処附近の風景。

3竿底紫鱗輪二釣伴一　4花辺白犬吠二流鶯一

（釣針をくつた魚がぐるぐるまはつてゐる。花のあたりにゐる白い犬は枝から枝へと移つて鳴く鶯に吠えてゐる。）

「詩解」は、第三句の「輪」を「輪（めぐ）」と訓むが、移動させる、移す、いたすの意。釣竿の魚が釣り仲間を移動させる、魚の動くにつれて彼等もその方に動いてゆくの意であろう。方干の「茅山贈二洪拾遺一」の「篋裏朝衣輪二酒家一」、ころもを酒家へと移す、酒代としてこ

ろもを致す意。後の句の「花辺の白き犬流鶯に吠ゆ」は野趣的な句いがする。類句が方干「夜会鄭氏昆季林亭」に、

白犬吠風驚雁起、猶能一一旋成行。

とみえる。犬の吠えることは方干の詩材の一つ。「隣家犬吠夜漁帰」（「山中言事寄贈蘇判官」）も、その一例。また「流鶯」の例も、同じく方干「惜花」の詩に「今日流鶯來旧処、百般言語滞空枝」、また「対花」に「野客須抛終日醉、流鶯自有隔年期」とみえる。二句に亘る「竿底…花辺」の「底…辺」の対比は、方干の好んだ手法。

檣辺走嵐翠、枕底失風濤（「暮發七里灘夜泊厳光臺下」）

平明旭日生牀底、薄暮残霞落酒辺（「尚書新創敵樓二首」第二首）

は、その例である。従って「詩解」に、「竿底」の例が諸橋『大漢和辞典』にみえないことを嘆くが、その必要はない。なお前の句の「紫鱗」（紫色の魚）についても『大漢和辞典』の中にないことを指摘するが、方干の詩には「紅鱗」「錦鱗」などの例と共に、「紫鱗」の例、

逸砌紫鱗鼓枕釣、垂簷野果隔窓攀（「湖北有茅斎、湖西有松島、輕棹往返、頗諧素心、因成四韻」）

もある。「何鱗」の語句は方干のよく用いた語といえよう。

次は頸聯、問題の箇処をはらむ。

5 長潭五月含氷気　6 孤檜中宵學雨声。

（長く続く谷川のせゝらぎは五月にひえ〴〵としてゐる。一本の檜は真夜中に雨模様の雰囲気を帯びてゐる。）

右の「詩解」の意の適否は、そのまま『枕草子』の解につらなる。ここでは後述にゆだね、しばらく措く。次は尾聯、結びの二句。

7 便泛扁舟應未得　8 鴟夷棄相始垂名。

（陽羨は山中の川に小舟をうかべてすぐさまここを去つても、まだ名を得る事は出来ないだらう。春秋時代の范蠡が越の大臣の地位をすて、小舟をうかべて五湖を渡り、陶朱公と変名して巨万の富を得、財を貧民に与へ、はじめて名を後世に残した。陽羨も范蠡と同じやうに名を後世に残してほしい。）

右の「詩解」の結びは、陽羨も―正しくは友人陶詳君―范蠡のように名を残してほしい意に解するが、隠居処に書きつけた詩である以上、わたくしにはもっと気楽な結びであると思われてならない。試みにいえば、「陶詳君と同じ『陶』の字を共有する陶朱公（鴟夷、范蠡に同じ）が宰相の地位を捨てて湖水を小舟に乗って渡り、後に莫大な富を得て後世に名を残したが、それとは違い、この山中の長い水を湛えた淵で気ままに小舟を浮かべている陶詳君は名を得ることはなかろう―とはいえ、のんびりと小舟を浮かべている君の方がむしろ羨ましい―」といった意には解し得ないだろうか。つまり陶朱公の態度に左袒していないことになろう。陶朱公鴟夷は、ほかにも方干の詩に登場する。「早發洞庭」の、結句「卻憶鴟夷子、当時此泛舟」はその一例であるが、なお「上張舎人」の結句、

他年莫学鴟夷子、遠泛扁舟用鑄金。

にみる如き例は、鴟夷の態度を肯定していないことになる。右の詩もその一例と解してよかろう。前述の如く問題の詩句は、方干の他の詩句にみえることを述べたが、第七句の「扁舟」の語も右の「上張舎人」の詩に「遠泛扁舟…」とみえ、彼の詩には類似句が多い。またこの詩の第七句の冒頭の「便泛扁舟…」の「便」なども

「詩解」に「すぐさま」と注するが、句の冒頭の「便」は、接続詞「さて」などに当る助字か。この例も、方干の詩に、

便殺微躬復何益（「謝王大夫奏表」第七句）

便向中流出太陽（「題松江駅」第一句）

などとみえる。このように方干の詩は、それ自身の中に類似の手法、特に類似語が多く、互いに詩句の内容を説明し合う。これは一つの万葉語の語義をさぐるために、『万葉集』中の用例を求めてゆく態度に似通う。この「用例主義」を嗤笑する「直感主義」が横行しようとも、わたくしの採らないところである。すでに説明を加えず通過した問題の二句も、方干の他の詩句がその解明の糸口となろう。

二

前述の如く、方干の問題の詩句は、

長潭五月含氷気、孤檜中宵學雨声（第五・六句）

である。檜の木が「雨声を学ぶ」とは如何なる意であろうか。既に示した注に「雨模様の雰囲気を帯びてゐる」とあるのは、「雨声」という聴覚的なものにそぐわない。この方干の詩句を学んだ『枕草子』、その十種ばかりの注をまず眺め、それらの大凡の諸説の方向をまとめてみると、次の如くなろう―殆んどその注釈書の影をみないわたくしの居室、ここで友人毛利正守・栗城順子兄姉両君の温い援助を蒙る。但しいちいちの例は煩雑を避けて省略―。

(1)注が簡単なため、本意の捕えにくいもの（窪田『評釈』・『精講』・『通解』・『全注釈』など）

(2)下露が繁くて五月雨に似る意（金子『評釈』・『精講』・『通解』・『詳解』など）

(3)吹き渡る風の音が雨の音に似る意（『詳解』）

これらが大別した結果である。特に現在では(2)が中心を占めるかと思われる。たとえば、田中重太郎『枕冊子全注釈』（『日本古典評釈全注釈叢書』昭和四十七年、角川書店）に、

（陰暦）五月のころ、（その下露が）五月雨の音に似ていると（中国の詩に）いわれている（という）のも、まことに風情がある。

とみえる。しかしほろほろと落ちる檜の木の下露、その下葉にやどる露が雨の音に似るといった感じは、都会者ならいざ知らず、田舎出身のわたくしにはどうも納得がゆかない。ましてや方干の原詩は山と水とに囲まれた陶氏の陽羨にある別業の夜なかのことである。下露と雨声とはどうもうまく結びつかない。(1)は問題外、残るのは(3)のみ。これは後述するとして、『枕草子』の注解類の如何に拘わらず、わたくしの態度としては、やはり方干の原詩を読むことから出発する。特に「雨声を学ぶ」という表現に注意しながら。

「学」は、「まなぶ」（まねぶ）ことであって、中国の散文にも韻文にも例が多く、特に大して珍らしい語ではない。『玉臺新詠』にみえる、

十三能織素、十四学裁衣（巻一、無名人「塘上行」）

は、衣を裁つことを学ぶ意。また、

軽鬢学浮雲、双蛾擬初月（巻十、范靖婦「映水曲」）

は、「軽やかな鬢」が「浮き雲」を学ぶ、まねる意。それと同時に「似る」、即ち鬢は浮き雲とまがうばかり、と理解してもよかろう。しかもこれは「學ぶ」の範囲を逸脱しているわけではない。「まなぶ」

「まねる」の意から「似る」の方向への過程にあるのが「学」の語の存在である。「学ぶ」は「似る」の意に到達はするものの元来の意は「まなぶ」が基本である。中唐ごろの詩に、「似ー如」の句法は甚だ多くみられるが、「学ー如」の句法がなかなか見出されないのは、「学」の基本の意が「学ぶ」の意であることによる。まして「似ー学」（「学ー似」）の句法などは、平仄の点からみてもあり得ない。しかし簡単に日本語に言換えるとき、「学」の意が「似る」という場合も有り得る。

晩唐詩人方干の詩は現存三百五十首ばかり、特に目立った表現のうち、甲を乙と比較して類似する場合に「似」をよく使用し、その数三十例近くにも及ぶ。

春葱を指剝するに腕似雪（「採蓮」）

開襟の五月は似高秋（「登新城縣樓贈蔡明府」）

松を聴くは似雨声（「山中寄呉磻十韻」）

などは、その一例に過ぎない。この「似」はまた「如」に通じる。

寸心似火頻求薦、両鬢如霜始息機（「山中言事寄贈蘇判官」）

谷鳥啼如有恨、庭花含笑似無情（「経曠禪師旧院」）

などは、その例であるが、要するに「似」は唐詩に関して決して珍らしい語ではない。しかしこの使用例が方干個人として比較的多いことは、彼が「甲は乙の似し」「甲は乙に似たり」的技法を好んだものといえよう。

もし然りとすれば、「学」については如何。やはり方干は、「似」の一類ともいうべき「学」の語を十例近くも用い、これは他の晩唐詩人と比較してかなりその数は多い。たとえば、

入山成白首、学道是初心（「贈詩僧懐静」）

他年莫学鴟夷子、遠泛扁舟用鑄金（「上張舎人」）

人間学佛知多少、淨盡心花只有師（「貽亮上人」）

などは、文字通り「まなぶ」こと。しかし、

学舞枝翻袖、呈妝葉展眉（「柳」）

庭際孤松隨鶴立、窓間清磬学蟬鳴（「贈乾素上人」）

などになると、前者は、舞を学んだようなしなやかな柳の枝（舞の姿にも似た柳の枝）、後者は、窓の間から洩れる清らかな磬の音は蟬の声を学ぶ（蟬の声に似る）、の意。即ち「似」「如」の方向につながる。しかしこれも「学」の本義を離れているわけではなく、方干のよく使用する「似る」はこの「学ぶ」とともに共存する。問題の「孤檜」が「学雨声」とは、「雨声を学ぶ」、「雨声に似る」ことになる。

このように「学」の意が明らかになったとしても、依然として檜の木が「雨声に似る」とは、どの点がそうなのか、『枕草子』の諸注も解しあぐむ。

ここで思いを翻せば、今より三十年ほど前のこと、『文華秀麗集』（古典大系本）の頭注を執筆中、滋賀貞主「奉和観落葉」の第一句、

寒声の落葉簾前の雨（巻下）

に出逢い、解し悩んだことを想起する。当時この第二勅撰詩集は本邦初注であり、未だ壮年であったわたくしの自信のなさ、加うるに諸橋『大漢和辞典』さえも影をみせない時代であった。ともかくも頭注として、「さむざむとした音を立てて風に木の葉が散る、すだれの前に降る雨のように」と注し得るのがやっとのことであった。これは、風に散る落ち葉が雨のように降ることであり、今では誰でも

承知のことである。また第一勅撰詩集『凌雲集』の注にみえる（昭和五十四年刊『国風暗黒時代の文学　中(中)』所収）、皇太弟淳和の詩の、

(28)「岸上の松声眠裏の雨」（「山崖の松風の音は夜眠の雨の音」）も

同様である。また目下執筆中の第三勅撰詩集『経国集』（巻十三）の、

丹治比文雄「奉試、賦二秋興一二首」の、

成雨葉声乱、收芳草色黄（第九・十句）

も同様である。この詩は「奉試」の詩、文章生試験制度による詩賦であり（『本朝文粋』巻二の「太政官符」参照）、この詩の場合は、「建・除」以下十二辰を各句の冒頭に置く課題をこなした詩である。これは「建」「除」以下を冠らせつつ常套句を表現すればまず及第に近く、そこにはむしろいきいきとした自由さがない。右の「雨を成して葉声乱る」は、落葉が雨の如き音をたてて風に乱れ飛ぶ意であり、前述の皇太弟淳和の作と同様に、早ければ弘仁中期以降、少くとも天長期には落葉と雨声との関聯的な表現が一般化していたのであろう。『凌雲集』の注に示した如く、唐人傅温の詩は『全唐詩』に未見、『千載佳句』にその姿をみせるが、『新撰類林抄』、或いは『趙志集』といったたぐいの佚名唐詩集引用のものでもあろうか。文献的にみれば、落葉の音を雨にたとえることは予想外に見あたらず、中唐白居易の「秋夕」（『白香山詩集』巻十）の、

葉声落ちて雨の如く、月色白きこと霜に似たり（0450）

が古い一例となろう。これは中唐元和六年の作、弘仁二年（八一一）に当る。前述の文雄の「奉試」の詩に先行し、或いは白詩を受容したかと推定することは時代的にみれば可能性がある。また『文華秀麗集』にみえる滋野貞主の「寒声の落葉簾前の雨」の詩も弘仁九年（八一八）以前であるが、これも中唐の元和六年（八一一）を降る。しかし『文集』の伝来は承和元年前後と推定され（拙著・中(上)、やはり中唐の白詩よりも某人もしくは某詩集の詩を学んだとみる方がむしろ危険性が少なかろう。但しこの「秋夜」など白詩の数葉を書いた断片が唐の賈人によってもたらされたとすれば、この句法を学んだ可能性はあるが。

ともあれ、これ以上は進捗しないが、方干の詩句は、「檜の木を吹く風が雨の音を学ぶ、雨のような音をたてている」情景を述べたのであり、ザワザワとかなり動きのある夜中の情景といえよう。清少納言の「五月に雨の声を学ぶ」も、この意にほかならない。このようにみてくると、『枕草子』の諸注のうち、前述(3)の松平静『枕草紙詳解』（明治三十二年刊、誠之堂書店）の、

檜の枝に風など吹きわたる音が、雨の降る音に似通ひたるを似ていふなるべし。

と注するのは、正しく意を摑んでいるといえよう―田中澄江訳「五月に風の吹きわたる音が雨に似かよっている…」（『日本古典文庫10』河出書房新社）もこの類である―。なお清少納言が「五月に」としたのは、方干の前の句「長潭は五月に氷気を含む」をここにもたらしたのであり―方干の詩には、すでにあげた「開襟五月似二高秋一」や、「古樹含二風長帯一雨、寒巖四月始知春」（「題二龍泉寺絶頂一」）の如く、一年のうちの月を詠む例が一つの特色である―、「五月に」は五月雨とは続けて考えない方が正しかろう。但し現在いう「五月雨」の意とした注に、桃尻語訳『枕草子』の、「五月の長雨の中で檜の葉から落っこちる滴の音をさ…」云々があり、また最近偶然入手した

台湾の比較文学者林文月女士訳『枕草子』(中華民国七十八年一月刊)にも、「梅雨季節、水滴如二雨声一」と漢訳する。それらの注はともかくとして、清少納言は方干の二句の抄出原文に接していたものとおぼしく、一種の巧みな翻訳といえる。唐詩の語を翻訳して新しい歌ことばに変えることは、万葉歌人柿本人麻呂なども早くより行なった手法である。たとえば巻二(二一〇)の妻の死を嘆く長歌の中の「春葉之、茂之如久」の「春の葉」なども、盛唐詩の「春葉」(chūye)の例を学んだ結果生れた歌語「はるのは」であろう(考証は省略)。これは一つの詩の聯語を一つの歌語に移入することである。研究者にとっては、その語の抽出の判定に時間を要するが、その過程を経た後は、比較的やさしい学業といえよう。しかし詩の二句を散文に織成すことはやや技法を要する。清少納言はこのような文業をよく心得ていた宮女のひとりであった。

三

清少納言が方干の詩をよく理解していたことは疑がないにしても、「学ぶ」の語は彼女のみの専用語ではなかった。『枕草子』の成立は寛弘年間ごろといわれ(その末年の寛弘八年は一〇一一年)、当時の詩の世界には、この「学ぶ」という表現があちこちにみられる。たとえば、大江匡衡の『江吏部集』にも、匡衡の「初冬同賦二紅葉高窓雨一」(「以二疎爲一韻」)の冒頭二句に、

紅葉時に來り漸くに盡き初め、一朝学雨拂窓疎(下巻、木部、紅葉)

とみえる。「ある朝、雨の音を学んで(雨の如き音をたてて)窓打つ葉がまばらにばらばら」の意―「一朝」には種々の意があるが、ここは「或る朝」の意と解するのがよかろう―。紅葉の葉が風に吹かれて窓を打ち雨に似た音をたてることがこの「学雨」である。

この詩集に後れる『本朝無題詩』、即ち院政後期(一一六二―一一六四前後)の総集にも、「学雨」の例がみえる。藤原通憲「春日遊二天台山一」の、

嶺檜風高多学雨、巖花雪閉ぢて未だ春を知らず(巻十)

は、清少納言の、前述の散文に同じく、「嶺の檜に風が高く吹き雨の如き音をたてる」、の意。落葉を雨声にたとえることは、「学ぶ」を用いなくても可能である。藤原敦基の「冬日遊二長樂寺一」の、

古岸松傾煙色緑、寒林に葉落ち雨声紅なり(巻八)

は、その一例。また「学雨」は、木の葉の場合ばかりではなく、松を吹く風の場合にもたとえられ、たとえば、

不二唯此地消二炎日一、学雨松声足断腸(巻四、避暑、源経信)
隨嵐林葉繞籬灑、学雨巖松当砌寒(巻八、冬日遊二長楽寺一、藤原実兼)

などともみえる。更に溯れば、『扶桑集』にみえる橘在列の源英明との贈答詩にも、

欹枕長吟招隠文、風後の松窟聴くに雨に似たり(巻七)

とみえ、風・松・雨の関係は、平安初期の弘仁期以来常套句として通用する。なお「学雨」は、『中右記部類紙背漢詩集』にも、

遮流林月似凌雪、雨を学ぶ砂風晴を弁じ難し(巻五、松風臨二池水一、菅原在良)

とみえる。また平安中期より鎌倉中期にかけての和歌及び詩句を類

聚した『和漢兼作集』（御所本）にも、

梧桐雨を学びて人初めて定まり、楊柳隠風月漸傾（巻九、夜深聞二落葉一、後二條関白内大臣）

の例をみる。それは同じく並列する「落葉」の歌、

風に散る音は時雨に聞き別かず濡れぬばかりは木の葉なりけり（中原長周）

時雨かと聞けば木の葉の降るものをそれにも濡るるわがたもとかな（藤原資隆）

なども、「学雨」の語を理解した上での歌の表現であった。

清少納言の「雨の声学ぶ」の解は以上で一応終る。あとは附言のみ。彼女が方干の詩を知ったのは、先行する『千載佳句』（草木部水樹）によるとみるのが一番無難であろう。しかも彼女は檜の生態を都中或いは郊外北山あたりで見たかも知れないが、なお『千載佳句』の同じ草木部の「檜」の項に、

静かに風簾に入りては夜雨の声（出典、晩唐張祜「楊州法雲寺双檜」）

とみえ、檜と風との接合が夜雨の声をかもすことは承知した筈である。しかも当時の『江吏部集』の詩句など、「学雨」の詩想は彼女の周辺に幾らも存在していたといえよう。これを散文にも応用した点に存在理由がある。わたくしは、『枕草子』についての知識は遺憾ながら殆んどもたない。しかし故金子彦二郎氏指摘の方干の詩の出典が明らかにされている以上、やはり方干の詩全体を粗読する位なら多少の労を払ってもよかろうという感想から小論は出発したのであった。「出典ハアアソウカ」といった態度ではなくて、せめてその出典文の周辺、その作者の詩を眺めることは学として必要であると思う。わたくしの如き残生の一措大は別として、若い諸子はなにも急ぐ必要はない、ありあまる歳月がある。

なお更に附言する。この十年ほど以前から平安朝和歌の歌語を漢詩語に求める方法が蔓延し、同じたぐいの論文類が山なす盛況を極める。実はこのたぐいの問題を取扱ったわたくしの経験は二十年ほど前に溯る―拙稿「古今集的表現の成立」（『解釈と鑑賞』第三十五巻二号）はその一例―。当時は果して歌語への投影と詩語とについて、一語一語かなり小心翼々とした態度で臨んだことを想起する。しかし最近の雑誌論文をみると、中には驚くなかれ一つの作物の中に、十あまりの語を指摘しているのも見受けられる。こうした問題は表面的に解決できるものではない。一つ一つ叮嚀に論ずるべきであろう。この種のものは量が富士山の如く高く積っても学問の進歩とは必ずしもいえない。むしろたとえ同じ方面であっても、広い裾野の如く種々の方法も自ら考えて試みるべきではなかろうか。明治びとの有識者のいう「婆心」をここに述べるのは、演題「休閑十五年」というわたくしの語りのゆえである。

（一九八九年初案、翌年七月七日了）